

エーゲ海の風

星座神話の向こうに広がる古代ギリシアの天文学

アテネのアレオバゴス（アレスの丘）からアクロポリスを望む。アレオバゴスの名は軍神アレスに由来し、古代ギリシアにおいて議会が開かれた場所とされている。

星座の中には、発祥時から意味づけが変化したものがあります。今回はその中でも、いて座やケンタウルス座、やぎ座など、主に古代メソポタミアに由来し、古代ギリシアに伝わる過程で変遷した星座について代表的なものを紹介します。

撮影／早水 勉・川口雅也

第2回 姿を変えた星座たち〈前編〉 古代メソポタミアからの変化

水先案内人 早水 勉（日本公開天文台協会）

はやみず・つとむ

星食観測・研究をライフワークとして活動し、日本天文学会天文功労賞、国際表彰「ホーマー・ダボール賞」を受賞。古代ギリシアを中心とする天文学史にも造詣が深い。



現代星座の父 プトレマイオス

先月号では、私たちの知る星座の多くが古代メソポタミアにルーツがあり、古代ギリシアに伝えられたことを紹介しました。これは星座成立の大きな流れではありますが、何の歴史でも単純なものではなく、古代の天文学でもそれは同じです。長い年月の間に誕生当初とは違った意味付けがなされたり、外国から輸入された文化が集合されるなどの変遷を繰り返した星座も多く、ようやく古代ギリシア末期に体系的なまとまりとなりました。現代に伝わる星座の基礎は古代ギリシア末期の天文学者クラウディオス・プトレマイオス（AC 83年～168年頃）の著書『メガレ・シンタクス（数学的集成）』にまとめられており、これらは「プトレマイオスの48星座」としてよく知られています。なお『メガレ・シンタクス』はその後イスラム世界に伝わり、そこで『アルマゲスト（偉大なる書）』と呼ばれるようになりました。

現在書店に流通している多くの星座に関する書物の中には、「プトレマイオスが星座の設定者である」といった記述が散見されます。しかしこれには誤解があり、プトレマイオスは、彼の時代から300年ほど前、天文学者ヒッパルコス（紀元前190年頃～125年頃）の頃にすでに広くギリシア人世界に認められていた星座を体系的にまとめたにすぎません。とはいえ『アルマゲスト』は後世の天文学の出発点として、



デンデラのハトホル神殿の天井星座絵。ハトホル神殿のオシリス礼拝堂にあったもの。2.53m×2.55mの大きさがある。（ルーブル美術館所蔵 撮影/廣瀬 匠）



ナイル川の中流域にあるエジプト・デンデラのハトホル神殿。©Hamerani Temple of Hathor at Dendera

デンデラの神殿に刻まれた、クレオパトラ（左）と息子カエサリオン。カエサリオンは、クレオパトラと共和制ローマのユリウス・カエサルとの間に生まれた子である。©Fiona Deal



©Published by Blanche Marantin and Guillaume Chaudiere, Paris, 1584.

プトレマイオス（トレミー）の48星座

■北半球の星座

こぐま/おおぐま/りゅう/ケフェウス/うしかい/かんむり/ヘルクス/こと/はくちょう/カシオペア/ペルセウス/ぎょしゃ/へびつかい/へび/や/わし/いるか/こうま/ペガサス/アンドロメダ/さんかく

■北にある黄道宮星座

おひつじ/おうし/ふたご/かに/しし/おとめ

■南にある黄道宮星座

てんびん/さそり/いて/やぎ/みずがめ/うお

■南半球の星座

くじら/オリオン/エリダヌス/うさぎ/おおいぬ/こいぬ/アルゴ/うみへび/コップ/からす/ケンタウルス/おおかみ/さいだん/みなみのかんむり/みなみのうお

※『アルマゲスト』の分類と記載順に従って掲載

それまでの知識を結集した記念碑的な著作ですから、プトレマイオスこそが現代星座の父と言っても過言ではないでしょう。

古代メソポタミアの星座

プトレマイオスをさかのぼること千年もの昔、古代メソポタミアの天文に関する資料として、前号でムル・アピンと呼ばれる粘土文書とクドゥルと呼ばれる境界石を紹介しました。さらにここでは、この地域で発祥した星座を示す重要な資料として、エジ

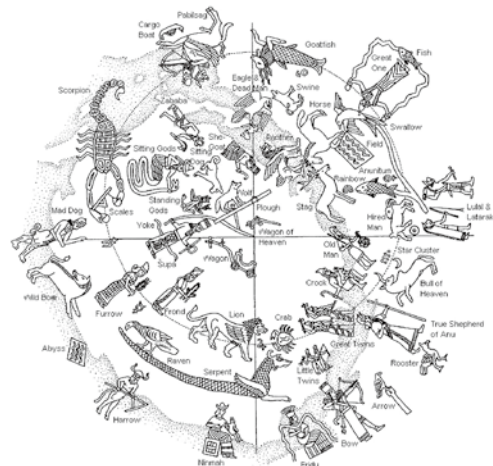


プト・デンデラにあるハトホル神殿の天井に彫られていた黄道星図（以下、デンデラの天井画）を紹介しましょう。エジプトのデンデラは、ナイル川の中流域にある女神ハトホルを祀っていた神殿です。古代エジプトでも紀元前2000年頃というかなり早い時期から建造され、最後の王朝（プトレマイオス王朝）のクレオパトラ（7世）女王にも改修されています。

古代エジプト末期は、古代ギリシア時代の末期から古代ローマ時代初期にあたり、王朝としては続いていたものの、ギリシア・マケドニアのアレクサンダー（3世）大王やローマのカエサルに支配される

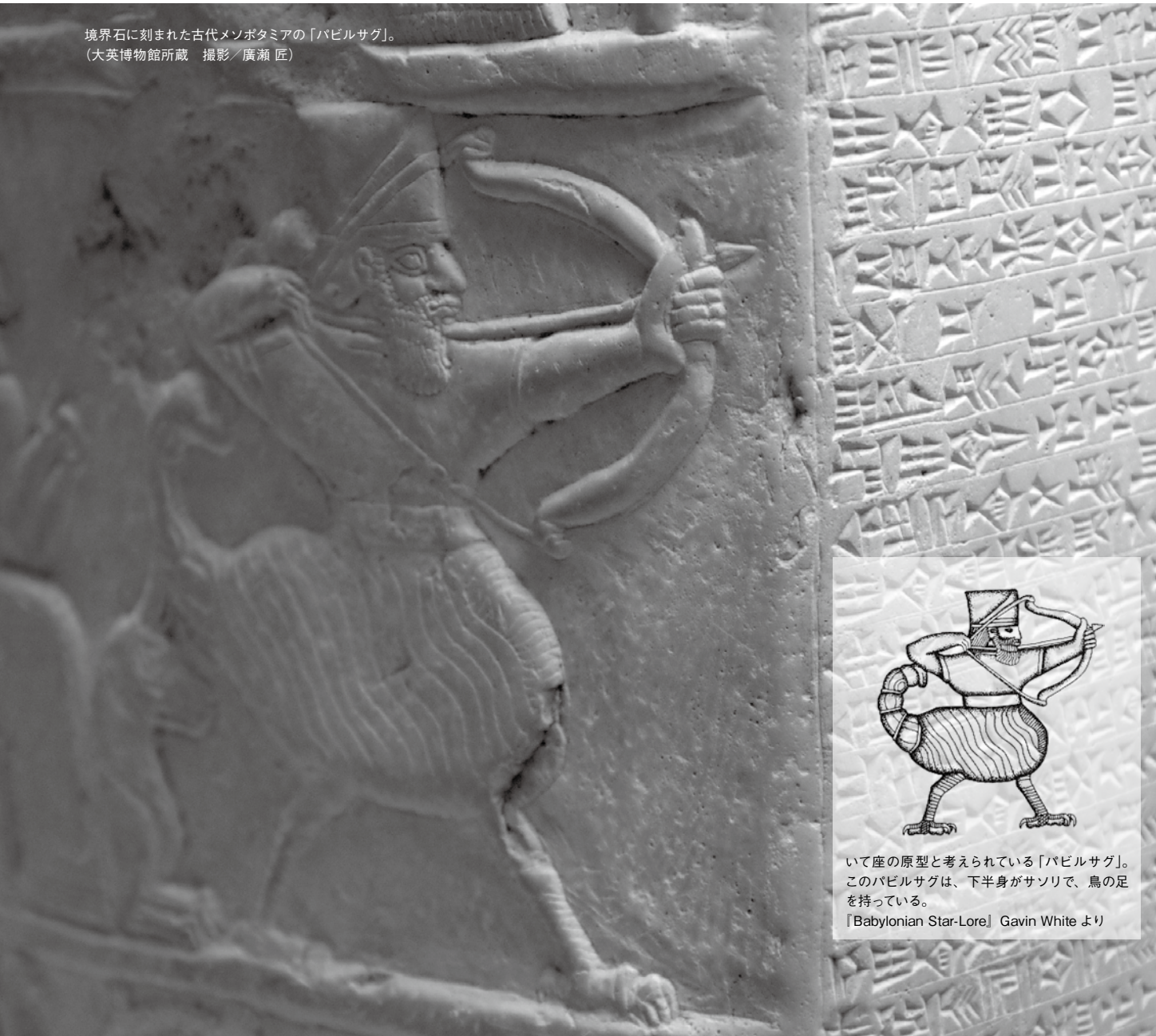
など国力が衰え、ついにはクレオパトラの時代で終焉を迎えました。このためデンデラ神殿には、古代エジプトから伝わる星座の中に古代メソポタミアや古代ギリシア末期（ヘレニズム期）の影響が色濃く見られます。ちなみにこの時期には、エジプトのハトホル女神は、ギリシア世界の愛と美の女神アフロディーテと同一視されていました。

デンデラの天井画は、フランスのナポレオン（1世）が1800年頃エジプトに遠征した際に発見されました。当時からこのレリーフはフランスとイギリスの両国から注目されていましたが、フランスのジャン・ルロランが火薬を使って切り出してしまいました。



『Babylonian Star-lore, An Illustrated Guide to the Star-lore and Constellations of Ancient Babylonia』による古代バビロニアの黄道帯図の復元図。
©Gavin White 2007

境界石に刻まれた古代メソポタミアの「バビルサグ」。
(大英博物館所蔵 撮影/廣瀬 匠)



いて座の原型と考えられている「バビルサグ」。このバビルサグは、下半身がサソリで、鳥の足を持っている。

『Babylonian Star-Lore』 Gavin White より

現在はフランス・パリのルーブル美術館に所蔵されています。現代、こんな暴挙はとも考えられませんが、フランスだけではなく当時のイギリスやヨーロッパ列強諸国も類似のことは頻繁に行っており、このような行為で貴重な資料の多くが永遠に失われたことでしょう。一方で、ルーブル美術館や大英博物館は、“我が国に移管されたからこそ貴重な遺産が長年にわたって保護され、研究も進んだのだ”と主張していますが！

デンデラの天井画は、やはりプトレマイオス朝の紀元前1世紀頃に作成されたことがわかっています。重要なのは、すでにこの時期には古代メソポタミアの星座が古代エジプトのこの天井画にも反映されていることです。これらの遺産から、古代メソポタミアで発祥した現代につながる星座の原型が研究されています。

これらの研究に関して、日本語の書籍としては『暦と星座のはじまり』（坂上務著）、『星座神話の起源／エジプト・ナイルの星座』『星座神話の起源／古代メソポタミアの星座』（ともに近藤二郎著）等が良質の参考書としてお勧めできますが、ここでは主にギャビン・ホワイト著『Babylonian Star-lore』から引用します。

G. ホワイト（英）は、アマチュアの古代メソポタミア研究家で、いわゆる天文学者ではありませんが、古代の神話や宗教に関心を持つノンフィクション作家です。G. ホワイトは主にムル・アピンの記述とクドゥル（境界石）に示された図柄と、エジプトのデンデラ神殿の星図を根拠として、紀元前1000年頃の古代バビロニアの黄道帯図を復元しています。

それでは、古代メソポタミアで発祥し古代ギリシアに伝わる過程で変遷した星座について代表的なものを紹介していきましょう。

姿を変えた星座たち

●いて座

いて座はギリシア神話の半人半馬人ケンタウルス族の一人ケイロンとされています。上半身が人間で下半身が馬という奇妙な

ケンタウルス族の由来は、ギリシア東方の騎馬民族がモデルで、ギリシアの国々と頻繁に戦闘していたことから、野蛮な怪物像として描かれたと考えられています。ただし野蛮なケンタウルス族の中でケイロンは例外で、神々からも一目置かれる賢人という、ギリシア神話のなかでも重要なキャラクターです。

この半人半馬の星座の原型は、紀元前2000年以前の古代メソポタミアにあると考えられますが、下半身は馬ではなく、サソリだったり犬だったり、また翼を持っていたり、古代ギリシアにはない様々なバージョンのある「バビルサグ」と呼ばれる奇妙な動物？が弓を射る姿で描かれています。現代に伝わる下半身が馬の基本形は紀元前2000～1000年頃にさかのぼることができます。なおバビルサグはシュメールの言葉で「先祖の長」「祖先」等の意味があり、悪魔を撃退するバビロニアのニヌルタ神ともみなされていました。

●やぎ座

下半身が魚という奇妙な動物の姿は、紀元前2000年頃の古代メソポタミアに見られます。このモデルは、水の神エンキ神に仕える「やぎ魚」で、肥沃な水をもたらす自然や植物に生命力を与えるものでした。この時代には、歳差の影響で冬至点がや

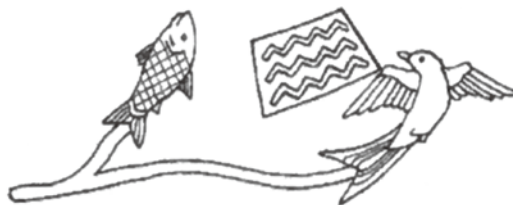
古代メソポタミアの「やぎ魚」。水の神エンキ神に仕える動物で、ギリシアに伝わりやぎ座となった。『Babylonian Star-Lore』Gavin White より



ギリシア神話におけるやぎ座の由来となった牧神パーンの像。魚になる前はヤギの下半身を持っていた。（アテネ考古学博物館所蔵）



古代バビロニアのアヌタムという魚とつばめの星座。魚がチグリス川、つばめがユーフラテス川を象徴している。両者の間の四角はヘガスの四辺形を表しており、同じものがデンデラ天井画（P49）にも見られる。『Babylonian Star-Lore』Gavin White より





力です。両大河が、ペルシャ湾に注ぎ込む前に合流する様が、紐の結び目として描かれているというのです。

シュメールの神話では、魚と鳥はとくに神聖な神とされていました。また、魚とつばめの間に描かれている方形は農耕地またはバビロニア国と考えられ、現代のペガサスの四辺形に当たっています。

●ケンタウルス座とおおかみ座

古代メソポタミアの「バイソンマン」と「マッドドッグ」のペアは、それぞれケンタウルス座とおおかみ座の起源と考えられます。マッドドッグは、「野獣」または「ライオン」と認識されます。バイソンマンは、紀元前5000年頃にさかのぼる、おそらく最古の星座のひとつで、バイソンの体を持つ人物が描かれています。バイソンマンは穏やかなキャラクターで、その性質は、ギリシア神話のケンタウルス族の中のポロスはうさぎ座の原型と考えられます。この「アヌ神の真実の羊飼い」は、デンデラの天井画にも「冥界の神 サフ」として見る事ができます。

やケイロンに引き継がれています。ギリシア神話の半人半馬族（ケンタウルス族）は、野蛮な怪物とされていますが、ポロスとケイロンは穏やかで尊敬される人物でした。特にケイロンは、神々からも尊敬を集める有能な教師で、ヘルクレス、アスクレピオス（へびつかい座のモデルとなった名医）、イアソン（アルゴ船団のリーダー）、アキレウス等の英雄を育てました。

このバイソンマンは、紀元前1000年頃アッシリアの時代には、ラマシュと呼ばれる人面有翼雄牛に姿を変えます。ラマシュはさながら日本の狛犬のように、宮殿や寺院の入り口に対で設置された守護神です。

●オリオン座

古代メソポタミアにおけるオリオン座の原型は「アヌ神の真実の羊飼い」と考えられます。アヌ神は天空と星の神です。特徴的に、歩く鳥が追従していますが、これ

はうさぎ座の原型と考えられます。この「アヌ神の真実の羊飼い」は、デンデラの天井画にも「冥界の神 サフ」として見る事ができます。

「アヌ神の真実の羊飼い」は、天界、地上、地界を行き来し、神の声を人々に伝えたり、人々の哀願を神に届けていたとされます。古代メソポタミアの占いによると、「アヌ神の真実の羊飼い」に惑星がやってくることは戦争や支配階級の横暴など恐ろしい前兆ととらえられ、月がやってくることは、良いことの知らせでした。一方で、「アヌ神の真実の羊飼い」が月に星食されると、支配者が王の地位から転落するとされました。

「アヌ神の真実の羊飼い」はギリシアに渡りオリオン座になりますが、古代ギリシア初期のホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』、ヘシオドスの『仕事と日々』には「オーリーオーン」として星座が記されており、星座の成立は非常に古いことがわかります。

古代メソポタミア・アッシリア時代のラマシュと呼ばれる人面有翼雄牛のレリーフ。手前にもう1体あり、2匹が対となっている。後のケンタウルスの原型と推定される。大英博物館でも最大級の展示だが、よく見ると十字型の継ぎ目がある。これは、現地から持ち出す際に船に乗る大きさに分割してしまったため。

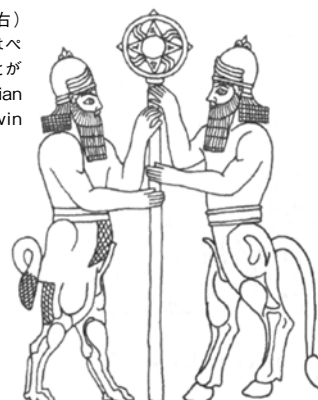
紀元前2300年頃のシュメール人によるバイソンマン。『Babylonian Star-Lore』 Gavin White より



ケンタウルスと戦うラビタイ人のレリーフ。ラビタイ人は神話中のギリシア人部族。ケンタウルスとギリシア人の戦闘としてもっともよく知られる伝説で、バルテノン神殿のメトープ（欄間の部分に当たる）にレリーフが彫られている。このレリーフの多数が英国に持ち出されており、写真は新アクロポリス博物館にあるレプリカ。



バイソンマン（右）とマッドドッグはペアで扱われることが多い。『Babylonian Star-Lore』 Gavin White より



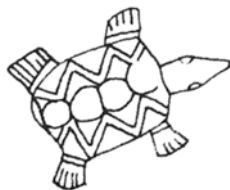
復元された「アヌ神の真実の羊飼い」。後に続いて歩く鳥は、うさぎ座の原型と考えられている。
 『Babylonian Star-Lore』Gavin White より



●かに座

かに座の原型は、古代メソポタミアの「クス」です。クスは「水の生き物」の意味とされ、カニの他、かみつくカメが相当します。古代メソポタミアの時代には、この位置に夏至点があり、太陽が最も高くなることから「天界の神アヌ神の座」と記されています。

このクスが古代ギリシアに伝わりかに座となるのですが、古代ギリシアではかに座のプレセペ星団（M44）に注目しており、早くもプレセペの名称も登場します。プレセペ星団は月のない夜には肉眼でもぼんやりと小さな雲のように存在がわかります。アラトスのファイノメナには「好天气に恵まれていたら、それだけいっそう荒天の、荒天の折には晴天の、それぞれ前兆に気をつけたまえ。蟹座に運ばれる飼いの秣桶（まぐさおけ・プレセペ）には、かくべつに注意深く見守らなければならない。その下方に薄い雲がことごとく打ち払われて、すっきりとしてきたらただちに。というのもあの秣桶は、荒天がおさまっていくと澄みわたるからだ」とあり、天気占いにも注目されました。類似の予言は古代メソポタミアの占星術のテキストにも、洪水の占いとしてすでに見られます。

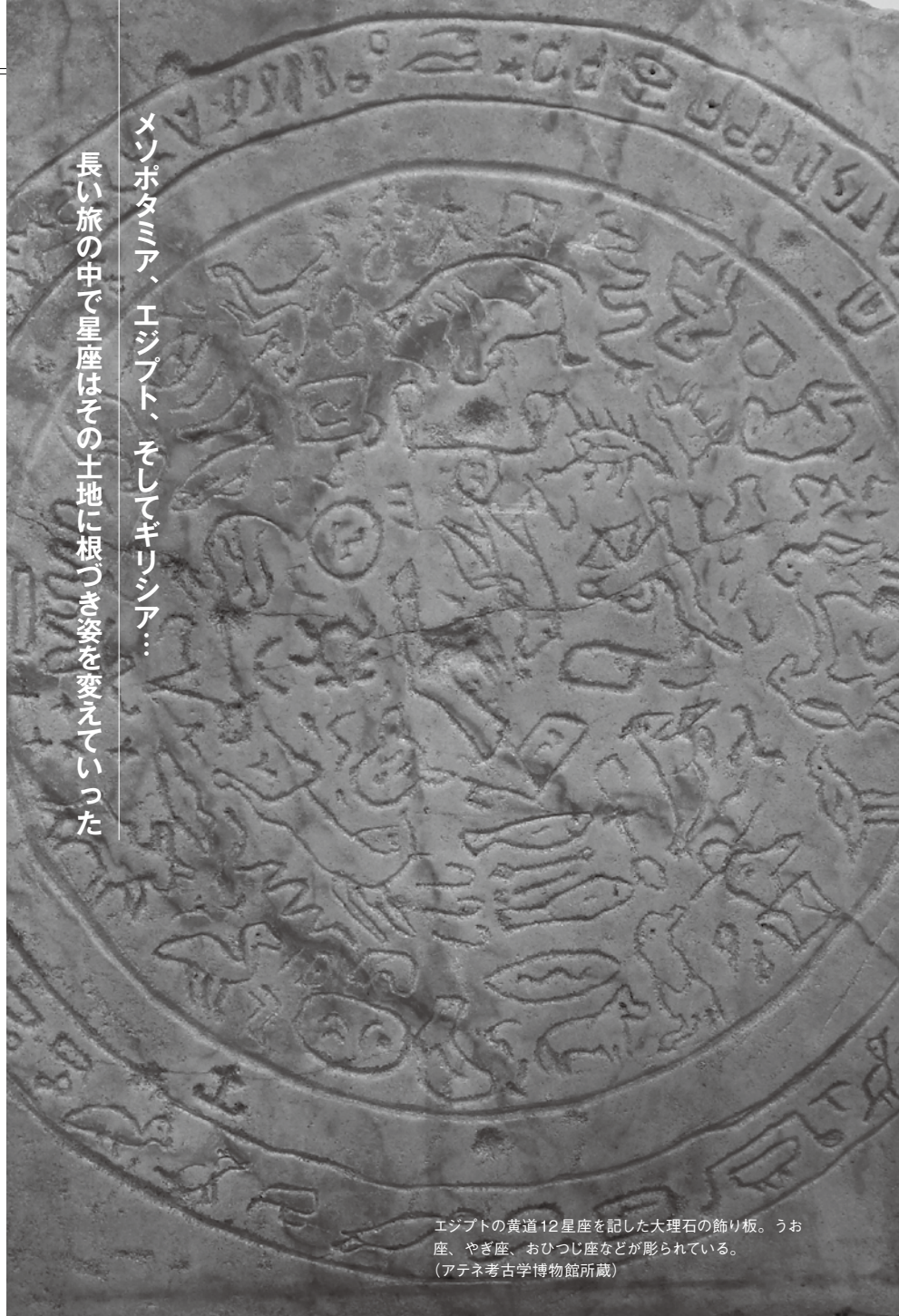


原始的なクス（水の生き物）のシンボルと境界石クドウルに刻まれたカメのシンボル。

『Babylonian Star-Lore』Gavin White より



長い旅の中で星座はその土地に根づき姿を変えていった
 メソポタミア、エジプト、そしてギリシア：



エジプトの黄道12星座を記した大理石の飾り板。うお座、やぎ座、おひつじ座などが彫られている。
 (アテネ考古学博物館所蔵)

■参考文献

- 『Gavin White 『BABYLONIAN STAR-LORE』
Solaria Publications
- 『星座の神話』原惠
- 『星座神話の起源 古代メソポタミアの星座』近藤二郎
- 『星座神話の起源 古代エジプト『ナイルの星座』近藤二郎
- 『星の名前の始まり』近藤二郎
- 『Star Names - Their Lore and Meaning』
Richard Hinckley Allen
- 『The Trustees of the British Museum』大英博物館
- 『Treasures of Ancient Greece』特別展 古代ギリシャ
- 『アルマゲスト』ブトレマイオス 著、藪内清 訳
- 『ギリシア教訓叙事詩集』伊藤照夫 訳
- 『星・古典好日』野尻抱影
- 『イリアス』ホメロス、松平千秋 訳
- 『ギリシア・ローマ神話』トマス・ブルフィンチ、大久保博 訳